

いの流水俳壇

間 浩太選

「当季雑詠」

木犀の香は天界の母までも

川村 博子

(評)木犀の花は晩秋になると、辺り一面に芳香を放つ。花はみな小花で、銀木犀の開花は少し遅れる。この句の作者は天国にいる母上に優しい思慕の念が強く、辺り一面に芳香を放っている木犀の香が天国の母のところまで届いて、木犀の好きであった母を喜ばせてあげたいという作者の気持ちが伝わってきます。

なにするでなく一人居の夜長かな

津田 久美

(評)一年中で最も夜が長いのは、冬至前後であるが、九月、十月になるとめつきり夜が長くなったことが感じられるので、秋の季節としている。

最も日中が長いのは、夏至前後であり、春を日永、秋を夜長と言うのは不合理であるが、季節は人間の感じを主にして言うのだから、差し支えないと言っている。秋の夜が長いと感じることは、万葉の時代から言われていたらしい。この句の作者に限らず、独居老人にとって夜が長いのは、淋しさを感じるのも時間とともに強くなる。読書の秋、趣味の秋と言われるが、秋の夜が長いのは寝入れない

者はつらいものであり、「よそに鳴る夜長の時計数へけり」の句のとおりである。

曼珠沙華道すべ正し観世音

弘瀬うき子

(評)「彼岸花」の別名があるように、秋の彼岸のころ、堤や畦の草原、藪の中などに茎を三十センチほど伸ばして、真紅の花(白色もある)を咲かす曼珠沙華を知らない人はいないと思います。曼珠沙華とは梵語で赤い花の意味のことです。観世音は慈悲にあふれ世人の苦しみをのぞく菩薩とのこと。

この句は私には、難解で正確な評もできませんが、観世音の教えはすべて正しいの意味でしょうか。曼珠沙華は「死人花」「捨て子花」「幽霊花」などの不吉な別名があるが、この名が観世音と関係があるのででしょうか。曼珠沙華と観世音の取り合わせが珍しく、このような取り合わせがよい句だと言う俳人もいる。

門柱の残るを叩く銀杏の実

片岡 包女

(評)この句を見たとき、山峡の過疎地域の一部を連想しました。銀杏は四月に開花するが、受粉は十月であり、晩秋銀杏の葉が黄落するころ、実は熟して落ちる。この家の住人は、もつと便利な地か、都会へ転居したのででしょうか。門柱はコンクリート製かブロック積みでしょうか。四角形の柱で、その柱の間は鉄製の扉があったが、腐蝕破損し、なくなつて門柱だけ残つたものと想像しました。庭に大きな銀杏の樹があり、毎年、銀杏の実が落ちて、人が住んでいたときは、

銀杏として焼いたり、茶碗蒸しにして食用にしていたと思われませんが、無人となつては、晩秋に実の落ちるにまかせ、多く落ちるときは雨の降るのに似るほど多く落ちたでしょう。

この句の作者は、銀杏の実が落ちるとき門柱に当たり、音をたてる状況を詠んだもので、実が門柱に当たつて大きな音を立てるのを叩くと表現しています。門柱が、この音により存在を主張していると思うと面白い。

友の逝く風なく揺れて秋桜 友草 水月

宿直の明け木犀に迎えられ 竹崎たかひろ

吹くからに色無き風の織る錦 大川 節弥

捨てられて案山子初めて空仰ぐ 刈谷 志津

ひとり居の妹待つ里へ秋桜 岡村 嘉夫

空き缶のかんからかんと秋の風 松尾満津於

ひつじ田や手酌の夫も老いにけり 竹崎 光子

折りたたみ自転車購う秋の旅 井上 郁子

運動会響け声援加茂山へ 森岡 照月

石仏にかがむ草の実つけしまま 岡本とも子

十五夜はさすがと見入る夜半の月 筒井 正子

年下となりたる父母の盆供養 間 浩太

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

いの町3597
893-2012

有料広告

医療法人 森木病院

光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL(088)893-0014

内科
外科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析